

趣味探訪

模型飛行機

(フリーフライト)

小野 哲

(大学法学部教授
法学部長・国家学)

——先生がこの御趣味を持たれたきっかけなどからお話しいただければ……。

小野 模型飛行機には多くの種類がありますが、私の場合は、フリーフライト(自由飛行型模型飛行機)の、ゴム動力機を中心としたスポーツが趣味になるわけです。この趣味を持ったときには、それが風と空のあそびということに気付かないまま、工作として始まったんです。

といいますと、古い話で東京の小学生のころですが、そのころは大正十二年の震災のあと間もない目白で、家の近くは原っぱだらけで、子供たちが遊ぶ空地があった、そのため、昭和の初期に始まった模型飛行機のブームがようやく定着しかけていた時期なんです。子供が作るには難しく、大

人がやるにはバカらしいというところで、大人の中の、ごく熱心な奇特な人たちが模型屋を開いていたんです。ですから、作り方は、学校じゃなくて、学校からの帰り道の模型屋さんで手ほどきを受けました。そんなことで、うまく自分では作れないけれども、おもしろい工作の遊びとしてフリーフライトの世界に次第に引き込まれていったんです。

今と違って、当時は材料も自分でそろえなければならなかったんですが、その材料の吟味も中学生の間にできるようになり、中学が終わるところまでに、あまり飛ばないけど「胴張り」といって、動力のゴムが外から見えない胴体の飛行機を作ることを中心するようにしました。その後、戦争など

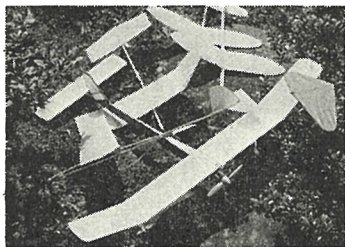
のために、この趣味も一時中断してしまいましたが、昭和二十五年になって挑戦を受けて、また始めることになるわけです。それまでは、飛ばすより工夫をたのしんでいたんですが、このころからフリーフライトを競技本位に考えるようになるんです。

そして、競技会に出るたびに強くなり、日本選手権をめざす気になり、昭和三十三年に一回目、同三十七年には二回目の日本選手権を獲得しました。

——フリーフライトですから、かなり広い場所があるんですね。

小野 いま

フリーフライトの競技会がやれる走りまわって差し支えない広い場所はいくら探しても演習場ぐらいいしか残っていないです。



ですから、練習をするのは、稻田の収穫が終わった後、裏作のない地帯です。冬から春の期間の、田んぼの遊びということになりますね。だから、フリーフライトを八方ふさがりの、禁じられたウィンタースポーツという人もある位です。

——それでも、かなりいい運動になるんじゃないかね。

小野 フリーフライトの飛行機は、競技のときになくすよりも、練習のときになくすことの方が多いです。ヘマをすると、川を越え、森をぬけて、まるでクロス・カントリーみたいに追っかけるハメになります。



す。風の日の完成機テストはコワイ感じで体力と度胸がいります。

——この御趣味の良さはどの辺にあると思われませんか。

小野 飛行機を飛ばすときは野鳥などと同じ世界にある気分、風の流れなど、自然の移り変わりに対してひじょうに敏感になったということ、それがこの遊びの功德かしら。だから、自然の風と遊ぶことがおもしろいと思う人の中に、このフリーフライトをやる人は、まだ増えるんじゃないでしょうか。

——今後の抱負などをうかがえれば……。

小野 最近では暇も根気もなくなくて……飛ばすことよりも、フリーフライトクラブをどう育てるかということの方が気になっていきます。選手であるよりは、コーチのようなクラブのまとめ役にされます。年寄役なんです。

それと、世界選手権の規格はスケールが大きいから、広い場所を必要としますが、日本ではそういう広い

場所が少なくなっているんで、スポーツとしてひじょうに変則で局限的です。それで、せまい場所でも楽しめるような、例えば、ちょっとした川原とか運動場で飛ばせるような自由種目を開発しなければと思うんです。そういうことで、現在、多少手をつけているんですが、日本の現状に合ったフリーフライト競技種目を開発すること、これも、僕のこれからの工夫になると思うんです。

こんなことは、自分で工夫して、失敗の連続を楽しむ「空の空なるあそび」ですから、他人様におすすめできる趣味とは思っていませんが、桐や和紙を材料に風とのたわむれば、できることなら続けたいと思っています。走る力が弱ったら、きっと風に気を引かれるでしょう。

——今後の先生の御活躍を期待いたします。どうも有難うございました。